

よくも悪くも 海がいまの自分を きめた。

株式会社伊藤精密製作所／代表取締役社長

伊藤康裕氏

いとうやすひろ

○3000日間の海

「なぜ、そう呼ばれるようになったかですか？」と言って彼は笑った。デイリー―それが株式会社伊藤精密製作所の若きリーダー、伊藤康裕の呼び名である。

デイリーは、ともかくサーフィンにハマった。どのようにして彼が海に魅せられていったかは、あとでゆっくりと語るとしよう。

風速が1メートルかわれば、サーフボードに張るセイルの大きさもかわるのがウインドサーフィンだ。風速は体感でわかる。彼は刻々と変化する海のコンディションを記録していた。大学3年のころのメモを見ると、1年のうち、なんと300日も海に通っていたのがわかる。そんなある日、「おまえ、毎日きてるな」プロのウインドサーファーに声をかけられた。「まるでプロなみに海に出てるじゃないか」それで、ついたあだ名が「デイリー」である。

では、ゆっくりと順を追ってデイリーについて語ることにしよう。彼もそれを望んでいるはずだ。いまの自分に至る道のりについて、彼は端折しよってほしくないはずだから。

デイリーの物語は、まず、彼のもっとも古い記憶からはじまる。

○背番号「3」の思い出

母・多津子たつこさんが、手づくりのユニフォームを着せてくれた。そうして、

会社の野球部の試合の応援に行った。3歳のころの思い出のシーン。それがデイリーにとってもっとも古い記憶の断片である。

母がつくってくれたユニフォームの背番号は「3」。おそらくは、当時全盛期だったミスター・ジャイアンツ長嶋の背番号を投影したものだろう。もっとも両親は、そろってドラゴンズファンのはずなのに。

背番号「3」が効果をもたらしたものの、デイリーは親の意に反して（？）ジャイアンツファンになった。デイリーの成長とともに選手としてのミスターは衰えを見せていったが、彼は地元のリトルリーグチームで順当に実力を発揮しはじめた。小学5年生でショートストップのレギュラーポジションを獲得。リリーフピッチャーとしてマウンドに登ることもあった。6年生になるとキャプテンもつとめている。

肘を痛めたため、中学に進学してからは送球に負担がかからないセカンドに転向したが、ここでも中心選手として活躍。やはりキャプテンにも任命されている。

「いまから考えると、当時から先頭に立って引つ張ってゆくことが性に合っていたんでしょね」

反面、父・三木男みきおさんが創業した会社の2代目として、周囲から御曹司おんざうしあつかいされることには憤りがあつたという。学校で上級生から「精密」と社名をもじって呼ばれるの

もいやだった。

○不透明な季節

高校は地元の進学校に入学したが、当時、学校群制度による入試が実施されていたため、振り分けられた学校には硬式野球部がなかった。デイリーにとって甲子園大会出場はあくまで淡い夢ではあったが、それもあつてなくついてしまった。

デイリーは野球のかわりにサッカー部に入部した。だが、県大会の予選には出ると負け。それなりにたのしんではいたが、やはり強豪校のチームとは温度差があつた。サッカーにも強い情熱が燃やせず、進学校のために学業の成績順位も目立たなかった。

デイリーは、ぼんやりとして色合いのはっきりしない高校時代の3年間を虚ろに過ごした。

やがて大学受験。デイリーは志望校に合格できず、浪人生活に入る。東京の予備校に通うために、はじめて親元を離れた。

周囲から「2代目」「跡取り」と呼ばれ、もの心ついたころには、すでに眼のまえにきめられたレールが敷かれていたようだった人生から、解き放たれた感じがした。

彼が住んだ予備校の寮は、築数十年という古いアパートで、薄いベニヤ板の壁と柱の隙間から隣室の明りがもれていた。だが、なに不自由なく育ったデイリーにしてみれば、そんな生活もかえて新鮮だった。ときに

文＝上野 歩(うえの・あゆむ)

作家、専修大学講師。著書に『恋人といっしょになるでしょう』(小説すばる新人賞受賞)など。

1月に初のエッセイ集『ふれあい散歩』を郵研社より出版。

公式ホームページ《上野亭かきあげ井》

<http://www1.odn.ne.jp/ayumu/> (写真／今 祥雄)

は、その壁の隙間からメッセージのメモをやりとりしたりした。

予備校仲間と遊び歩き、遊ぶ金が足りなくて牛井屋でアルバイトもはじめた。

そうやって思いきり自由を謳歌した結果として、当然のことながら翌年の受験でも志望校に合格できなかった。

「あともう1年」と、デイリーは浪人を切望したが、多津子さんは涙ながらに合格した大学に入ってくれと訴えた。

デイリーは母親の言葉にしたがつて千葉工業大学に入学した。

○海との出会い

ひとまず入った大学だったが、デイリーは納得がゆかず、翌年の受験に備えて通学しながら勉強をつづけていた。

「ほんと往生際が悪いですよね」そう言って笑うデイリー。

そして、これがまた大いに矛盾しているところなのだが、一方で大学のウインドサーフィン部にも入部している。

「キャンパスで勧誘していた先輩たちが真っ黒に陽焼けしてて、みんなカッコイイですよ。まだ4月で肌寒いのに、やっぱり真っ黒な素足でビーチサンひっかけたね」

大学に通い、ときおり部の活動に参加しながらも、受験勉強をつづけ

るといういまひとつ地に足がつかない毎日を送るデイリー。そんな彼の心に激烈な変化が起こったのは、9月にあった20日間の部の合宿によってだった。

デイリーは、ここにも受験参考書を持ち込んだ。あき時間があつたら、勉強するつもりだったのだ。ところがサーフィン漬けの毎日がつづくなか、そんな暇があるはずがなかった。そうして合宿が終わるころには、デイリーは海の魅力にすっかりまいつてしまつていたのである。大学の再受験などとはやどうでもよくなった。ひたすらサーフィンだけをつづけていたかった。

デイリーの海通いがはじまつた。大学2年生のときに2000日、冒頭でも述べたが3年で3000日、卒業をひかえた4年次にも250日海に出ている。ワンボックスカーに布団とガスコンロを積み、浜で1週間寝泊りしたこともあった。1日の終わりとともに水を浴び、カップラーメンをすすり、布団にくるまって眠る。夜が明ければふたたび海に繰り出す。

○つかの間の淡い夢

親のコネによる就職口はいくつもあつたが、デイリーはいっさいこじわつた。自分の進むべき道は、自分で選ぶつもりだった。デイリーは、ロボットをつかつてのファクトリーオートメーションに興味があり、就職先の会社

を選んだ。それでも、頭のどこかに、親の会社を継いだ際の、現場の自動化のことがあつたかもしれない。

入社した先では、希望に反して工場全体の生産ラインの設計部門に配属された。しかしそれも、いまから思えば広く仕事の流れをつかむうえで、ひじょうに役立つことになった。そしてあいかわらず週末には海。

この会社にはけつきよく7年間在籍した。そのうち1年半は兵庫県三宮に駐在し、そこで阪神・淡路大震災にも遭遇している。もちろん週末ごとに、西の海をたづぶりと堪能してきたことはいまでもないだろう。

あわよくば、このまま会社員として過ごせないものだろうか、あの波に乗るときの浮遊感のように、ふとそんなふうに夢想することもあった。だが、入社して3年めくらいから、「帰ってこないか」という三木男さんの声が頻繁になつてきた。5年めに、それは、「もういいかげんにしろー」にかわり、6年め、「おれの顔をつぶす気か!!」となった。三木男さんは会社の幹部に、すでにデイリーがもどることを宣言してしまつたというのだ。デイリーも、さすがにそろそろ……と思わずにはいられなくなつたが、それでもいまの職場に、自分が存在した足跡のようなものを残したいと強く思った。7年め、彼はひとつの大きな成果を残し、もうひとつ新しい仕事の目途も立つて職場を後に

した。

○感謝

1998年、デイリーは伊藤精密製作所に入社した。

三木男さんは、彼のために経営企画室室長というポストを用意してくれたが、社内の立場、位置づけがはつきりせず、はじめて体験する製造業という職場に戸惑うことばかりだった。上司も部下もない。つらかつた。

入社して3年め、デイリーは業務全般の見直し、会社の仕組みづくりに乗り出す。ここで立場が明確になった。そうなれば彼のペーシである。デイリーは、客先から引き合いがあつてから出荷するまでの情報の流れを洗い出し、これを一本化し、製造と営業の部門間の壁を取り払うべくつとめた。

2003年2月、社長就任。会社の業績はけつしてよい状態ではなかった。

「私はサラリーマン時代もバブル以降で、よい時代というのを経験していないんですよ。ですから、べつにあたりまえだと思つていました」

デイリーは、人材を育成し、組織をつくることこそがなにより重要だと考えた。社員の意見もよく聞いた。

「一、実行 一、親和 一、感謝 一、責任 一、共栄」が社訓である。そ

のうち、デイリーは「感謝」の気持ちをもつとも大切にしたいという。そう身に染みる思い出があつた。会社員時代のことだ、福島のスキー場でスノーボードをたのしんでいた。サーフィンと同様、スノーボードもきわどいまでにぎりぎりのところに挑むのがスリリングで面白い。もう陽もかげつていた。薄闇のなかアイスバーンで滑り、木に激突した。ふと見やると、左脚の膝から下があらぬ方を向いている。そのとき、コースの反対側にいた若い男性2人が気づき、すつ飛んでしてくれた。1人は急いでパトロールを呼びに行き、1人は苦痛に表情をゆがめるデイリーについてくれた。それまで一面識もないたぐさの人々が集まつてくれ、彼を下の救急まで連れて行ってくれた。会社の上司が迎えにきてくれ、彼を千葉の病院に搬送した。デイリーは、海を眼のまえにのぞむ病院をちやつかり選んでいた。そこでも、看護師さんたちが親切にケアしてくれた。見舞いに訪れてくれた海の仲間たちのおかげで2か月間の入院生活も退屈しなかつた。そしてその日々は、デイリーのなかに感謝の気持ちをしつかりと植えたのである。

感謝という言葉とともに、デイリーはこれまで出会ってきた多くのひとびとの顔を思い浮かべる。そしてもうひとり、この言葉を添えたいひとの姿が―手すからのユニフォー

厳密な検査体制を構築。伊藤精密製作所の品質・精度へのこだわりがうかがえる。

自動旋盤機をはじめとし130台以上の設備を所有する伊藤精密製作所。



ムを幼い彼に着せてくれた多津子さんは、2000年1月、病に倒れすでにこの世にない。

「サーフィンはね、沖の方からうねりがきたとき、さいしょに波に乗った者に権利があるんですよ」とデイリーが言った。「だから、それまでにいろいろ駆け引きがある。1本め、2本め、3本め、どの波に乗るか、眼さきだけで動くのではなく、いかにいい波をとらえられるか―会社も同様ですね」

デイリーの眼が、製造業という大海原を見つめるものになった。

「よくも悪くも、海がいまの自分をきめたんだって、そう思います」



「今、一番何が大切なのか、必要なのか」。頭で瞬時に設計する伊藤社長。

COMPANY PRO-file

株式会社 伊藤精密製作所
所在地：岐阜県海津市平田町今尾 1663-1
TEL: 0584-66-2633 FAX: 0584-66-2757
担当者：代表取締役社長 伊藤康裕
事業内容：部品製造（切削および鋳造）、FA装置の開発・設計・製造・販売
エミダス会社・工場詳細情報：
<http://www.nc-net.or.jp/emidas/gaiyou.php?69715>
※「エミダス工場検案」のキーワード検索「伊藤精密製作所」で検索できます。本誌付録の「ザ・日本製造業パワーアップCD-ROM」にて、同社の工場技術動画をご紹介します！